

令和5年度

福山大学教育振興助成金活用研究

実践報告集

【第12集】



令和6年4月

福山大学

巻頭言

福山大学
副学長 鶴田泰人

福山大学では、学生の主体的な学修及び教育研究活動の深化、またそれらを地域連携の中で展開することを期し、「教育振興助成金」を創設しています。本助成金は学長の直轄予算として新設されたものであり、令和5年度も、「特色ある教育方法の開発に対する取組」と「学生の参加する社会連携活動に対する取組」の2分野について12のテーマに沿った個人及びグループによる研究が募集され、前者で6テーマ、後者で4テーマが採択されました。令和5年度で第12回となり、その実践報告集「第12集」が刊行される運びとなりました。1年間にわたって精力的な取組をしていただいた先生方のご努力に対し、心より感謝申し上げます。

近年の教育改革で「大学教育の質保証」、「アクティブ・ラーニング」、「学修者本位の教育への転換」等の概念が、ごく一般的なものとして広く現場に普及してきている中で、コロナ禍の影響でコロナ禍に適応するための有力な手段の一つとしてICT技術を用いた遠隔授業が否応なしに導入されることになりました。コロナ禍後のこれからの授業は、デジタルの活用と併せてリアル（対面）活動も不可欠、学習場面等に応じた最適な組合せが必要となってきました。教育の方法の開発と同時に学生の活性化、学生の種々の活動の支援など、これからは異なる分野の学生や社会人を交えて多面的に知識を組み合わせることで知恵を創り出す学修者本位の学びの仕組みへと重心移動が進んでいます。

本学でもわれわれ教員自身の「アクティブ・ラーニング」を高度化しながら教育の実践と成果を鮮明に可視化し、さらにそのことを通して本学の教育改革に豊かさを生み出すためにも、この報告集を有効に活用していただければと思います。内容等にご興味等を持たれたら、直接研究者にお問い合わせくださるようお願いいたします。この報告集があらゆる場面で有効に活用されることを願っています。また、これまでの報告書は本学HPの「教育助成金報告書」に掲載していますのでご参照いただければ幸いです。

令和5年度 教育振興助成金 一覧

1. 特色ある教育方法開発助成金

| NO | 研究者名 (代表者) | 学部 ・学科 | 課題名 | 課題番号 | 頁 |
|----|---------------|---------------|---|--------------|----|
| 1 | 安藤 孟梓 他4名 | 人間文化 ・心 理 | ビデオフィードバックを用いたカウンセリングの基本的関わり技法の理解と習得 | PERG2023-101 | 1 |
| 2 | 佐藤 圭一 他1名 | 工 ・建 築 | デザインプロセスを重視した建築製図・設計演習テキストの企画 | PERG2023-102 | 6 |
| 3 | 金子 邦彦 | 工 ・情報工 | チャットボットと DocsBot を活用したQAシステムの開発と授業利用への挑戦 | PERG2023-103 | 7 |
| 4 | 佐藤 淳 | 生 命 工 ・生物工 | 福山大学キャンパスを生物多様性の学び舎とする | PERG2023-104 | 8 |
| 5 | 渡邊 正知 | 薬 学 部 | ICTを活用した学修の推進 | PERG2023-105 | 13 |
| 6 | 前田 吉広 他1名 | 大学教育 センター | 未来創造館が掲げる“CROSSING ※1”な学びを実現する、学生間相互学習支援システムの研究開発 | PERG2023-106 | 26 |

2. 学生の参加する社会連携活動助成金

| NO | 研究者名 (代表者) | 学科 | 課題名 | 課題番号 | 頁 |
|----|---------------|----------------|--------------------------------|--------------|----|
| 7 | 水上 雅晴 | 生 命 工 ・海洋生物 | 学生と市民が協力した身近な海洋環境の保全と啓発展示の実施 | PERG2023-107 | 30 |
| 8 | 大杉 朱美 | 人間文化 ・心 理 | サイバー防犯教室の対象拡大と広報啓発活動における発信力強化 | PERG2023-108 | 32 |
| 9 | 濱本 有希 他2名 | 人間文化 ・心 理 | 地域安全マップ作製指導員のネットワーク構築の試み | PERG2023-109 | 40 |
| 10 | 赤澤 淳子 他2名 | 人間文化 ・心 理 | こども遊び広場における運営の効率化と学生による広報活動の強化 | PERG2023-110 | 43 |

1 ビデオフィードバックを用いたカウンセリングの基本的関わり技法の理解と習得

所属 人間文化学部 心理学科
職名 講師
氏名 安藤 孟梓

(成果の概要)

カウンセリング場面におけるクライアントとの良好な関係性を構築する関わり方を習得するプログラムを作成し、4名の大学院生を対象にビデオフィードバックプログラムを2日間実施した。

成果①：ビデオフィードバックプログラムの作成

講義形式で実施する認知学習とロールプレイ形式で実施する実践学習の2段階で構成されたプログラムを作成した。プログラムの具体的内容は以下の通りである。

最初に90分の講義形式でマイクロカウンセリングおよびヘルピングスキルに基づいた技法の説明をパワーポイントの資料（認知行動療法ワークブック、マイクロカウンセリングに関する書籍、ヘルピングスキルに関する資料から作成）を用いて説明した。講義内容は、(1)クライアントの関わり方の目的（例：図1-1）、(2)関わり方の段階による違い（例：図1-2）、(3)9つの基本的関わり技法と目的（例：図1-3）、(4)クライアント自身に振り返りや考えることを促す3つの技法と目的（例：図1-4）、(5)各スキルの注意点（例：図1-5）、(6)ビデオフィードバックの説明（例：図1-6）で構成された。なお、講義後に12の技法について自分がどれくらいできると感じているか自己評価をしてもらった（図1-7）。

図 1-1

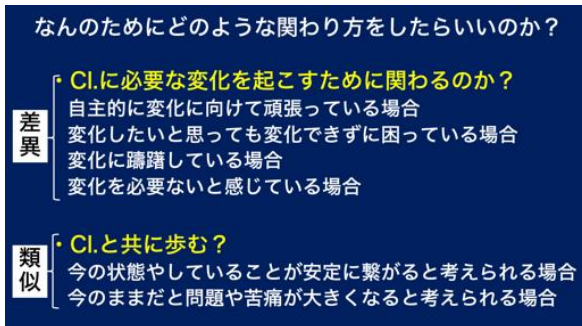


図 1-2

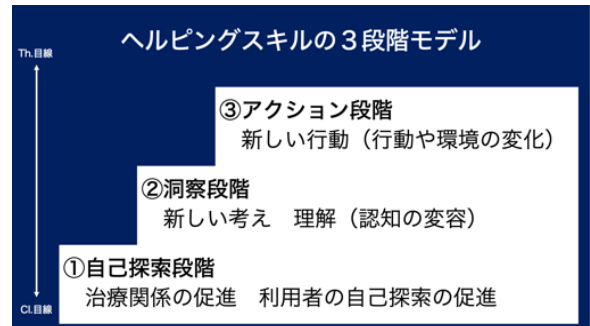


図 1-3

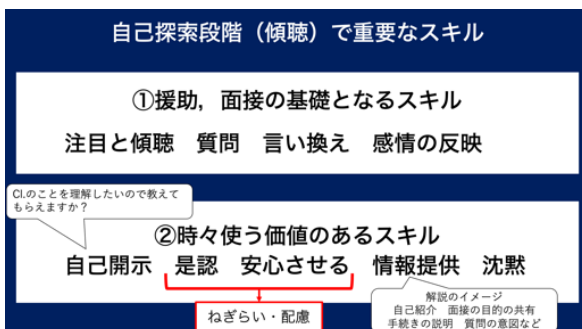


図 1-4

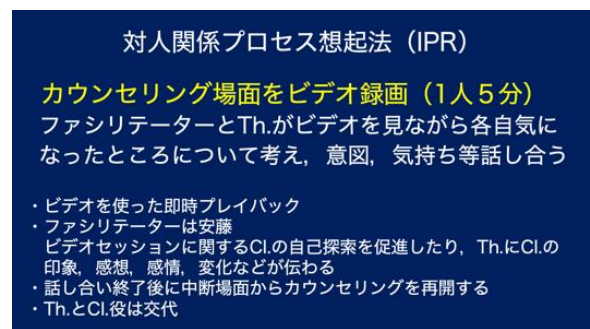


図 1-5

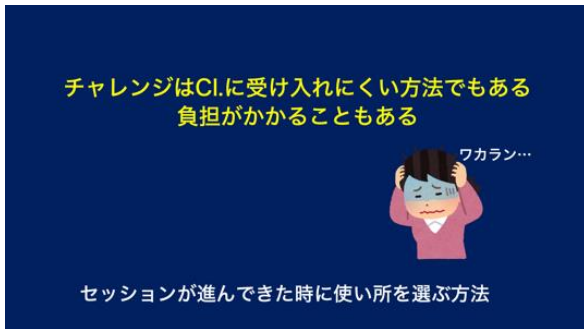


図 1-6

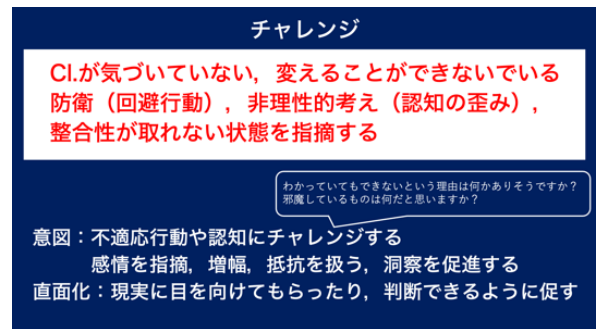


図 1-7

ヘルピングスキル自己評価表

年 月 日 氏名

ヘルピングスキルがどれくらいできそうか？

| | 自己評価レベル | | | | | コメント |
|-------------------|---------|---|---|---|---|-------|
| 自己探索段階のスキル | | | | | | |
| ・注目と傾聴（顕在） | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | _____ |
| ・注目と傾聴（潜在） | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | _____ |
| ・質問の開き方 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | _____ |
| ・質問の焦点 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | _____ |
| ・言い換え | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | _____ |
| ・感情の反映 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | _____ |
| ・是認 安心させる | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | _____ |
| ・情報共有 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | _____ |
| ・沈黙 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | _____ |
| 洞察段階のスキル | | | | | | |
| ・チャレンジ | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | _____ |
| ・解釈 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | _____ |
| ・自己開示 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | _____ |

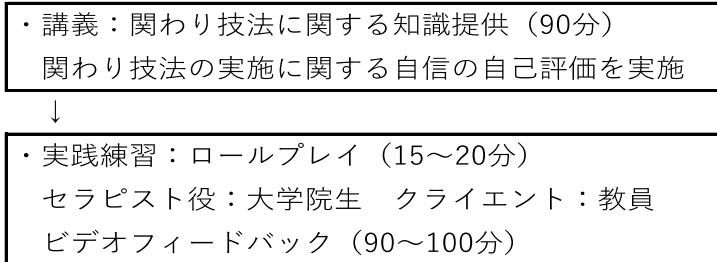
講義後にビデオフィードバックを実施した（図 2）。1 回目はセラピスト役を大学院生、クライアント役を教員とし、2 回目以降はセラピスト役、クライアント役ともに大学院生が行った。セラピスト役は 5 分間とし、5 分経過後に次の大学院生と交代してカウンセリングを継続した。各回でセラピスト役とクライアント役はローテーションした。なお、実施場面はカウンセリングの初回場面として、クライアント役の相談内容や背景は各自で考えた架空のケースを使用した。

ロールプレイ実施後に録画したビデオを全員で見直しながら、ファシリテーターの教員が場面ごとにセラピスト役が使用したスキル、質問の意図、返し方の理由を確認した。また、セラピスト役の使用したスキル、質問、返しに対してクライアント役が受けた印象、感情の変化、質問によって起こった変化（自分を振り返ったり、出来事について考えた内容）、セラピスト役に対する抵抗感も同時に確認し、セラピスト役がどれだけクライアント役に添うことができていたかを確認した。プログラム実施中の配置図は図 3 の通りである。

図 2

ビデオフィードバックプログラムの流れ

1日目



2日目

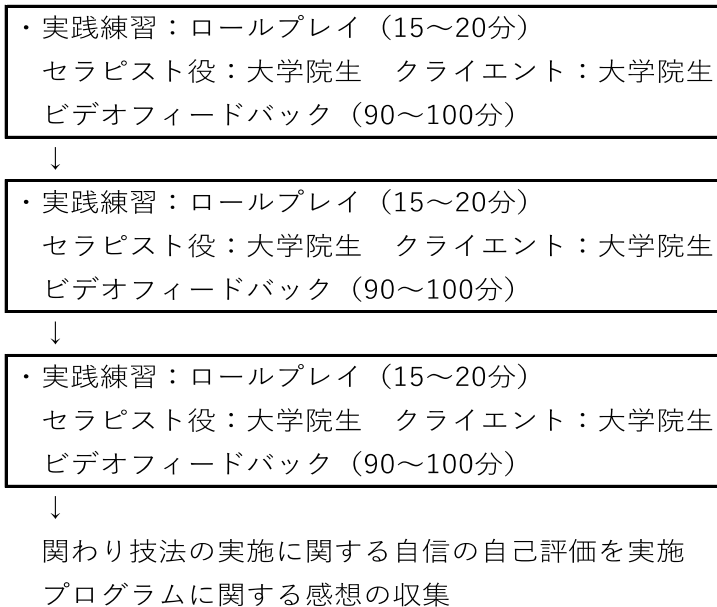
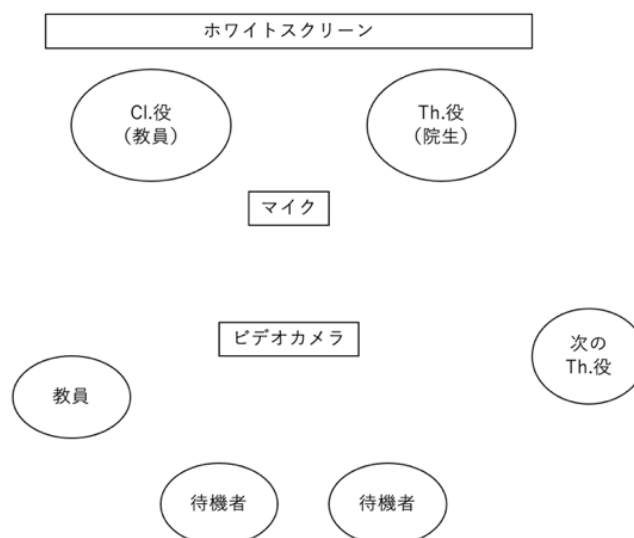


図 3

ビデオフィードバック実施時の配置図



成果②：ビデオフィードバックプログラムの結果

(1) セラピスト役の自己評価（表2）

ビデオフィードバックプログラム前後に実施した自己評価（図1-7）について、技法ごとの変化量および段階ごとの変化量の合計値を算出した。その結果、できるようになったと評価が変化した技法とできていないと評価が変化した技法が個人ごとに存在することが明らかになった。自己評価が下がっている場合は、ビデオフィードバックを用いた練習を行うことで実施の難しさや自分が思っているよりもできていないことに気づく機会となっていると考えられる。また、共通して言い換えの技法はできていると評価し、是認・安心させると自己開示の技法についてはできていないという評価に変化していた。言い換えの技法は学部/大学院の講義内で扱われる技法である。実践形式の練習中で初めてクライアントの評価を直接フィードバックされるという経験から、自分は思っているよりできているという認識に変化したと考えられる。一方で、是認・安心させると自己開示の技法はクライアントとの良好な関係性を気づくために重要であるが、学部/大学院の講義であまり扱われることがなく、実施が難しかった可能性がある。なお、大学院生Aは参加の都合でセラピスト役を1度しか経験していないため、すべての変化量が0になっている。

表2
ビデオフィードバックプログラムの結果

| | 大学院生 | | | | 合計 |
|-------------------|------|-----|-----|-----|----|
| | A | B | C | D | |
| 自己探索段階のスキル | 変化量 | 変化量 | 変化量 | 変化量 | |
| ・注目と傾聴（顕在） | 0 | -1 | 0 | -1 | -2 |
| ・注目と傾聴（潜在） | 0 | -1 | 1 | 0 | 0 |
| ・質問の開き方 | 0 | -1 | 0 | 0 | -1 |
| ・質問の焦点 | 0 | 1 | 1 | -1 | 1 |
| ・言い換え | 0 | 1 | 1 | 0 | 2 |
| ・感情の反映 | 0 | 1 | 1 | -1 | 1 |
| ・是認 安心させる | 0 | -1 | -2 | -1 | -4 |
| ・情報共有 | 0 | 0 | 0 | -1 | -1 |
| ・沈黙 | 0 | 0 | 0 | -1 | -1 |
| 個人内合計 | 0 | -1 | 2 | -6 | -5 |
| 洞察段階のスキル | | | | | |
| ・チャンレンジ | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 |
| ・解釈 | 0 | 2 | 1 | 0 | 3 |
| ・自己開示 | 0 | -1 | 0 | -1 | -2 |
| 個人内合計 | 0 | 1 | 2 | -1 | 2 |

(2) 参加者の感想

参加した大学院生4名から実施後の感想を収集したところ、複数の回答が得られた。以下は得られた回答から内容をまとめたものである。

回答1：講義で技法に関する知識を学んでいたが、実際に技法がどのようにクライアントに作用するのかを初めて知ることができた

回答2：大学院の講義内で実施してほしい

回答3：セラピストが解釈していたクライアントの考えと実際にクライアントから聞いた考えの違いを知れたり、内容の違いの意外性に驚いた

(3) ファシリテーター役からの評価

最初から全員がクライアント役の話をお聴こうという態度を示していた。また、セラピスト役がうまくいってなかったと自己評価していても、クライアント役からは評価されている場面も見られ、セラピスト役の対応がどのように機能するのかを経験できているようだった。一方で、クライアントとの良好な関係性の構築よりも問題解決を目的とした質問や情報集を中心とする対応、何を質問したらいいのか分からない状態になる場面も見られた。

まとめ

今回の教育振興助成金の実施では、主に助成金で購入した書籍から作成した認知学習とロールプレイ形式で実施する実践学習の2段階で構成されたプログラムを作成した。実施した結果、個々人で実施ができている技法と練習が必要となる技法が明確になることが分かった。また、共通して練習が必要な技法も明らかになった。参加者からは肯定的な感想が得られており、今回のビデオフィードバックプログラムの実施は大学院生の教育として有用である可能性があり、大学院全体での実施も視野に入れていく必要がある。ただし、ファシリテーターによってフィードバック内容が大きく異なる可能性と実施に時間がかかることを考慮した方法を考える必要がある。

本申請課題の実施者

安藤 孟梓 (代表者)

日下部 典子 (分担者)

2 デザインプロセスを重視した建築製図・設計演習テキストの企画

所 属 工学部 建築学科
職 名 教授
氏 名 佐藤 圭一

(成果の概要)

本研究は、難化する国家資格の建築士試験にも対応するため、本学工学部建築学科のカリキュラム進行にあわせた建築製図・設計の独自テキストの企画を行うものである。当初計画していた外部協力者が、諸事情のため年度途中から研究参画できなくなり、謝金の使用額が少なくなった。2年間の研究計画の1年目と位置付けていたが、一部変更して実施した。そのため、連続申請を予定していたが、2024年度は継続申請せず初年度の課題を完遂することに努め、2025年度に改めて申請して研究計画全体を完了させたい。

本年度は、1年間の建築製図・設計の授業を通じて課題を集めると共に、主に既存テキストの分析を行った。本研究では、建築学科の製図・設計教育の段階を初修・基礎・発展・応用の4段階に独自に設定して研究遂行した。

当初の想定通り、2段階目である「基礎」(1年後期～2年前期)の段階に多くの課題があることが明らかになった。製図・設計における線の太さ・種類の意味が理解できないまま、建築図面「のようなもの」を描く学生が半数を占める。また、平面図は理解できるが、高さ方向の立面図・断面図が苦手な学生がここで躓き、建築図面が理解できないまま卒業時まで引きずる。

既存テキスト分析では、以下のように類型化できた。①製図原論あるいは図学的な原則ルールを記したもの、②建築士試験に特化した対策本、③建築士試験2次製図試験の過去問・予想問題とその解説、④「建築士試験」と銘打たず大学の教科書化したもの、⑤実例(実作品と架空建築の場合がある)のトレースを通じて製図を学ぶもの。いずれも、これからの組み合わせに過ぎない。学生が躓きやすい初修から発展に移行する基礎段階において、建築への興味を持続できる理論(計画、環境・設備、法規、構造、施工等)とデザインプロセス双方を網羅した総合的なテキストの企画・開発が必要となる。2024年度は授業実践でさらに基礎調査を継続した上で、2025年度に本研究に再申請し、当初予定通りのオリジナルテキスト開発に結実させたい。

3 チャットボットと DocsBot を活用した QA システムの開発と授業利用への挑戦

所 属 工学部 情報工学科
職 名 教授
氏 名 金子 邦彦

(成果の概要)

① 私立大学情報教育協会教育イノベーション大会での成果発表（令和5年9月）

チャットボットは、AIによる対話システムで、学生の質問や相談に自動応答する。情報工学科の授業「コンピューターサイエンス」で、学生の自主的な学びを促進するためにチャットボットを導入した。授業資料を用いてチャットボットをカスタマイズし、学生による質問に対して、自動で、具体的な回答を得られるようにした。その結果、学生はチャットボットを積極的に利用し、授業内容や勉強方法について相談していた。学生評価では、使いやすさと有用性が高く評価された。この研究は、AIを活用した学修支援システムの可能性と、学生の自主的な学びを促進する新たな方法を示すものであり、福山大学におけるAI活用の発展に寄与する。成果は「共同利用センターICT専門委員会」においても報告済みである。

② 私立大学情報教育協会教育イノベーション大会での成果発表（令和6年3月）

チャットボットを活用し、大学の授業における学生レポートのフィードバックを充実、強化することを目的としている。チャットボットは、適切な調整により、特定の授業内容やレポート評価尺度に応じたフィードバックが可能となる。情報工学科の2つの専門科目「AI演習」、「データベースシステム」における学生のレポートに対し、チャットボットによる個別フィードバックを行った。まず、AIのフィードバックは好評であった。フィードバックとして、推敲された学生レポートのサンプルを示し、学生に個別の評価コメントを与えることが可能であった。学生からは、AIのフィードバックが有用であり、学習意欲の向上にもつながったこと、専門知識の学びや批判的思考の必要性についての認識が深まったとの感想が得られた。この研究は、AIを活用した学修支援システムの可能性を示すとともに、大学でのAI導入に向けた知見を得ることができた。

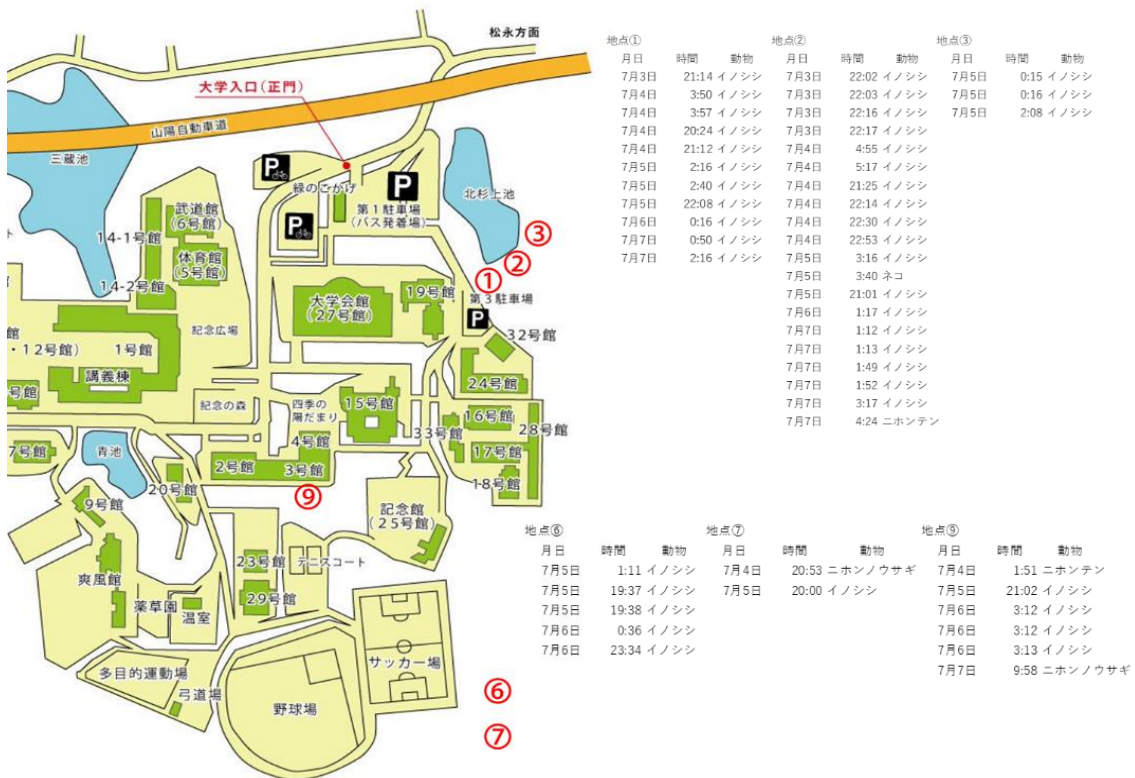
4 福山大学キャンパスを生物多様性の学び舎とする

所属 生命工学部 生物科学科
 職名 教授
 氏名 佐藤 淳

(成果の概要)

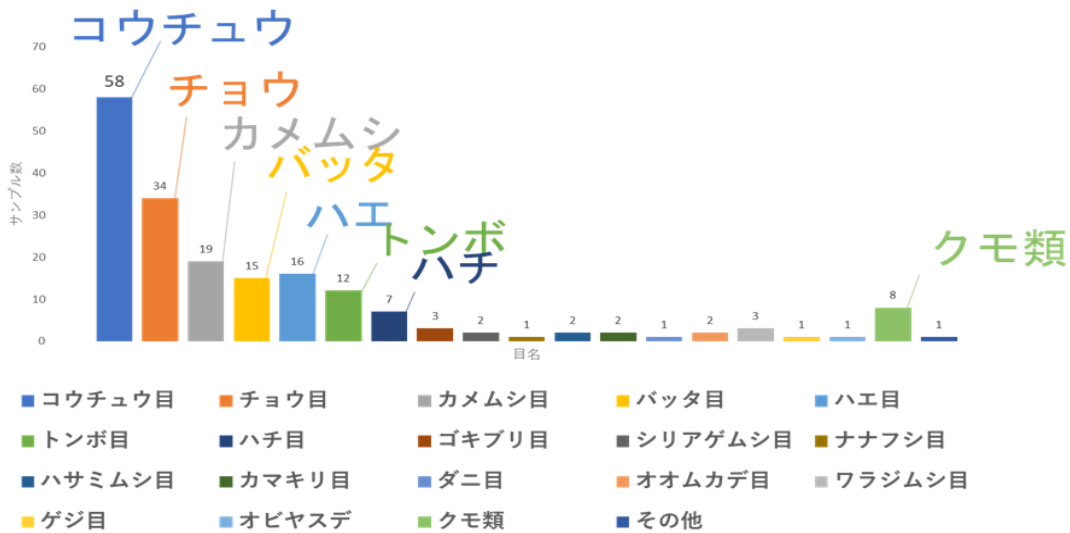
1. 生物観察実習 (1年) : トレイルカメラによる野生哺乳類の撮影

成果 : 以下のように、学内の6か所において、イノシシ、ノネコ、ニホンテン、ニホンノウサギの動画を撮影することができた。イノシシについては4頭の子ずれの母親も撮影でき、以下の広島ホームテレビ地球派宣言でも放映された。



2. 生物多様性実習 (3年) および卒業研究 : 植物と動物種の目録とDNAデータベースの作成

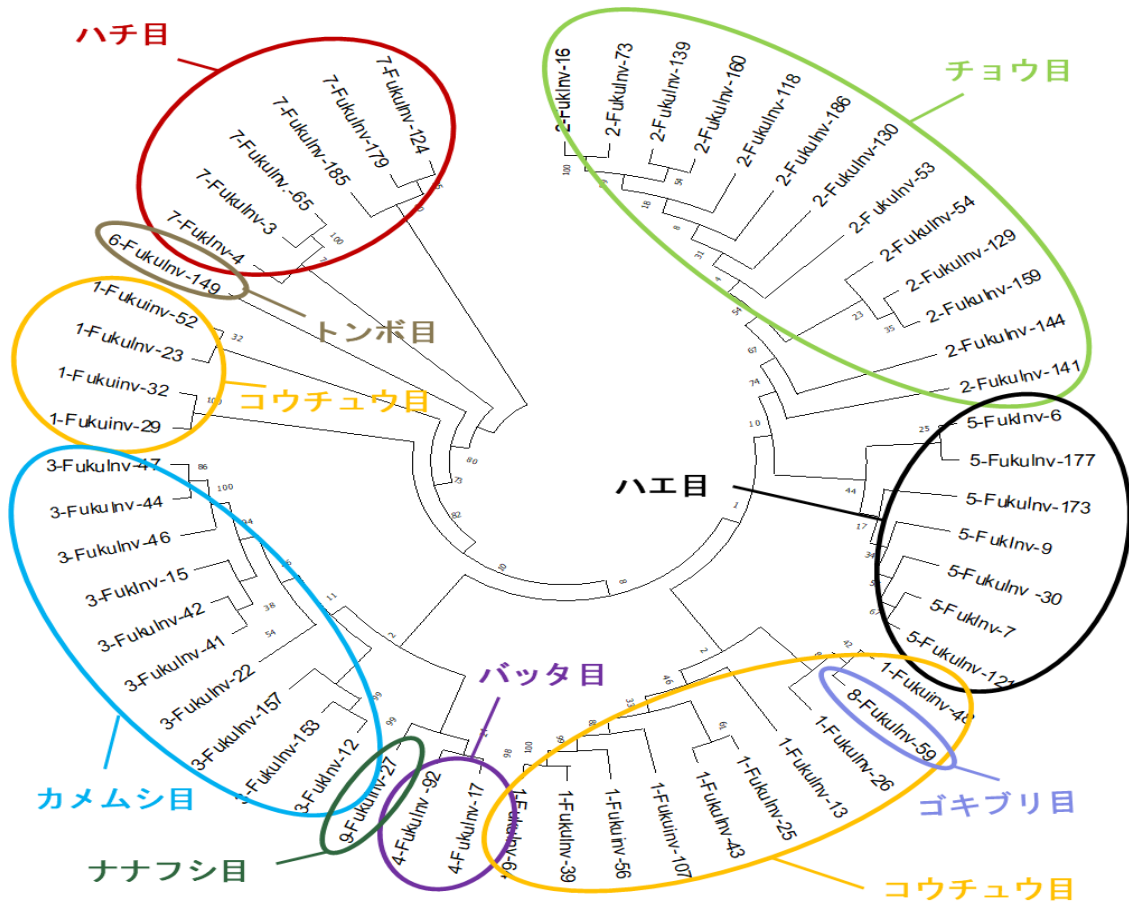
成果 : 以下の場所から188個体の無脊椎動物を収集し、種同定を行った (一部を3年生の実習で行い、残りは4年生が卒業研究で実施した)。すべてのリストは添付しないが、18目のグループに属する無脊椎動物を同定したことになる。



さらに、これらの無脊椎動物の中から、62種を対象に、ミトコンドリア DNA Dloop 領域の DNA 塩基配列を決定し、DNA データベースとした。DNA 塩基配列の間の関係性を表す系統樹を下に示す。それぞれ目のグループごとにまとめた。こちらの実験についても、一部を3年生の実習で行い、残りは4年生が卒業研究で実施した (松村 2024)。

参考文献：

松村洸佑（2024）福山大学における昆虫類のローカル DNA データベースの構築. 2023 年度福山大学 卒業論文.



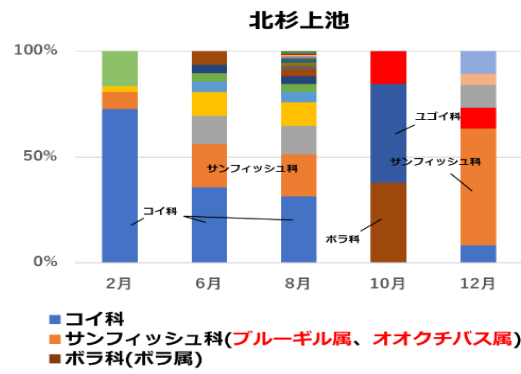
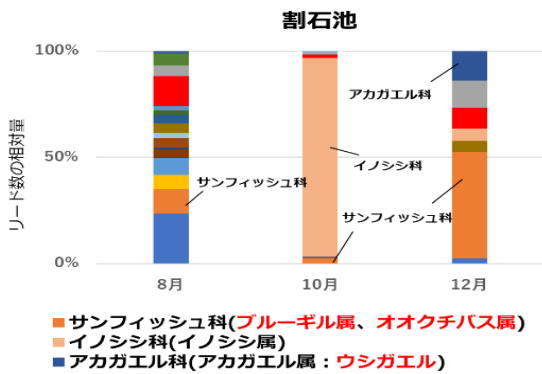
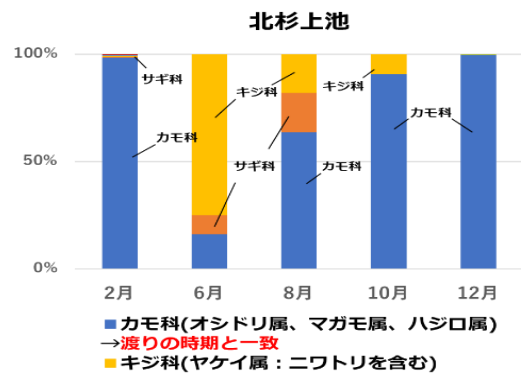
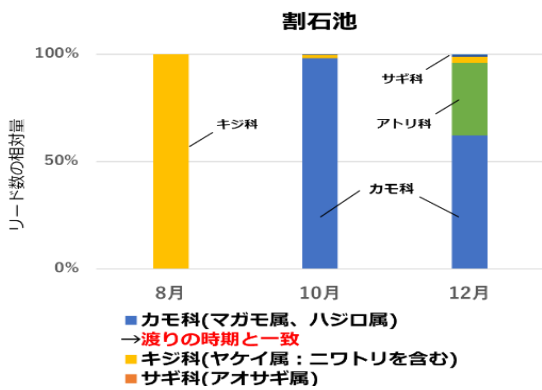
3. 卒業研究（4年）：環境 DNA 分析による動物種の目録の作成

成果：2023年2月から12月まで2カ月に一度、福山大学東側の北杉上池と、西側の割石池から採水し、以下の図に書かれた月について、PCR および次世代シーケンサーMiSeqを用いた分析に成功した。この研究は、4年生が卒業研究として実施した（堀 2024）。具体的には、鳥類をターゲットとした環境 DNA 分析を行った。結果として、カモ科、キジ科、サギ科をはじめとした鳥類のみならず、イノシシ（哺乳類）、ウシガエル（両生類）、ブルーギルやオオクチバス（魚類）なども合わせて検出された。特に、ウシガエル、ブルーギル、オオクチバスの検出から、本学周辺の池には外来種が多く生息することが明らかになった。今後は、外来種が豊富な池の生態系の特徴などを調べていることができるのではないかと考えている。

参考文献：

堀晶瑛（2024）環境 DNA 分析に基づく福山大学の生物多様性調査. 2023 年度 福山大学 卒業論文.

採取場所



赤字は外来種

以上の福山大学周辺域の生物多様性調査は、本学の学生が「生物多様性とは何か?」、「生態系とは何か?」、「何故、その時にその場所でその生物が生息しているのか?」など、自然共生社会を形成する上で身につけるべき必須の知識を、体験とともに身につけることができる。これらの様子は、広島ホームテレビ「地球派宣言」でも取り上げられ、本学の魅力ある生物多様性教育を発信することができた。しかしながら、「福山大学キャンパスを生物多様性の学び舎とする」ためには、より多くの動植物の分布と、そのつながりを理解することが重要であるため、引き続き調査が必要である。今後も、教育振興助成金に申請するつもりである。

参考 Web サイト :

2023. 12. 20

【地球派宣言】「福山大学」キャンパス内で野生動物の生態調査

https://www.home-tv.co.jp/pitanew/movie_contents/chikyuuha_032-2-2-2/

尚、上記の卒業研究に関する発表会スライドを添付する（松村 2024、堀 2024）。卒論については添付資料が多くなるために添付しないが、提供可能である。

5 ICT を活用した学修の推進

所 属 薬学部
職 名 准教授
氏 名 渡邊 正知

(成果の概要)

本課題では、学生自身の ICT 活用学修の推進と教職員の新たな ICT 活用教育の推進を目指して、学生自身の実際の取り組みを学生（同級生や後輩など）へ向けて発信する機会を以下のように設けました。

第1回 2023年7月12日（水）13時10分から C0201 教室にて

タイトル：「iPad で叶った！効率&モチベ up 勉強法！」

演者：薬学部6年 北村優里香さん

アンケート回答者数 46名

第1回の「iPad で叶った！効率&モチベ up 勉強法！」は、主に薬学部1年生を対象に行いました。参加者の56%が iPad を所有していましたが、その活用はまだ不十分だったようで、当該講演が大変参考になったようです。また iPad を所有していない参加者の多くが、「機会があれば活用してみたい」と iPad 学修法を大変興味深く感じたようです。

第2回 9月28日（木）11時30分から 34202 教室にて

タイトル：「勉強の質と効率を向上させる iPad 活用勉強法」

演者：薬学部5年 藤井惇一さん

アンケート回収者数 109名

第2回の「勉強の質と効率を向上させる iPad 活用勉強法」は、主に薬学部1年生を対象に行いました。前回参加された方の半数以上がまだ iPad 学修を始められていないようでした。一方、今回始めて参加された方の iPad 所有率は46%。所有されている方の多くはまだ十分に活用されていないようで、当該講演が参考になったようです。また、iPad を所有していない参加者の多くがやはり「利用してみたい」と興味を感じたようです。

前2回の講演を受けて、2024年1月25日に薬学部1年生に iPad（タブレット）学習の実態を調査してみました。すると、iPad 所有率は10ポイント以上増加していました。そして何より、多くの学生が「iPad（タブレット）を用いた学修法は効果的」と感じていることが明らかとなり、学生による学生のためのこのような機会は、学修効果・効率を上げる上で非常に有効であることが示されました。今後、学生同士で ICT を活用した学修における工夫や効果を共有し、さらに効果的な学修方法を身につけてもらえるような機会が提供できたら良いと思います。

第3回 11月28日(火) 9時10分から

図書館2階ラーニングcommonsにて

タイトル:「オンラインディスカッションのあり方」

演者:メディア・映像学科 廣川依歩希さん、栗山諒也さん

タイトル:「授業における動画コンテンツの活用」

演者:メディア・映像学科 菅萌香さん、栗山諒也さん

第3回は、「オンラインディスカッションのあり方」および「授業における動画コンテンツの活用」の2講演が、主にメディア・映像学科の学生や教員を対象に行われました。ICTを活用した授業を受けた学生が、どこにメリットを感じ、どこにデメリットを感じたのか?素直な意見を伺うことができました。「オンラインディスカッションのあり方」では、ディスカッションしにくい通信環境や双方向通話が難しいなどの問題点が挙げられ、それぞれに対応する具体策が提案されていました。また、効果的なディスカッションツールとして、Office365_Whiteboardの活用が提案されました。一方、「授業における動画コンテンツの活用」では、実例を交えイメージを捉え易くするためのコンテンツの選び方、興味関心が湧くコンテンツの選び方、教科書の内容をわかり易くした教育動画の選び方などが紹介されました。また授業動画を配信するために必要な環境あるいは配信する上での注意点などが紹介されました。授業アンケートのように、学生からのフィードバックは教育者にとって大変貴重な情報となります。さらに今回は、学生からICT活用授業の改善策まで提案していただきました。このような学生の声をぜひとも各教員の授業改善に役立ててもらいたいと願うところです。

令和5年度 福山大学教育振興助成事業
 助成種別：特色ある教育方法開発
 課題名：ICTを活用した学修の推進

| | | |
|-------|----------|--------------|
| 研究代表者 | 共同利用センター | 渡邊 正知 |
| 研究分担者 | 経済学部 | 石丸 敬二 |
| | 人間文化学部 | 大庭 真之 |
| | 生命工学部 | 真田 翼 |
| | 薬学部 | 藤 幸之 |
| | 薬学部 | 奥山 健人 |
| | 大学教育センター | Tang, Yikwen |
| | 大学教育センター | 紀路 謙之 |
| | 共同利用センター | 磯崎 健一 |
| | 附属図書館 | 大野 恭子 |

第1回 ICT活用学修の紹介
 日時：7月12日（水）13時10分から
 場所：CD201（水産資源創造大講義室）
 出席：薬学部5年生、北村敬重先生
 「iPadで呼った！授業＆モテペグ勉強法！」

アンケート回答数
 薬学部1年生 33名
 薬学部5年生 2名
 教職員 11名

今日の講義はあなたの学修に役立ちましたか？

平均=4.40

iPadをお持ちですか？

学修に役立っていますか？

今後利用してみたいですか？

iPadなどを使ったペーパーレス学修法を、始めてみようと思いませんか？

このように講義の録音や資料を動画で残したいと思いませんか？

平均=4.35

スマートフォン以外のデバイスで、学修によく利用するものがあれば使ってみたい。【複数回答】

第2回 ICT活用学修の紹介
 日時：9月28日（水）11時30分から
 場所：34202（34号館2階講義室）
 出席：薬学部5年生、藤井博一さん
 「前後の両と両手を向上させるiPad活用勉強法」

アンケート回答数
 薬学部1年生 102名
 薬学部2年生 2名
 教職員 5名

今日の講義はあなたの学修の参考になりましたか？

平均=4.45

第2回（7/12）の講義に参加しましたか？

iPad学修に、始めていますか？

第2回（7/12）の講義に参加しましたか？

iPadをお持ちですか？

学修に役立っていますか？

今後利用してみたいですか？

iPadなどを使ったペーパーレス学修法を、始めてみようと思いませんか？

このように講義の録音や資料を動画で残したいと思いませんか？

平均=4.00

スマートフォン以外のデバイスで、学修によく利用するものがあれば使ってみたい。【複数回答】

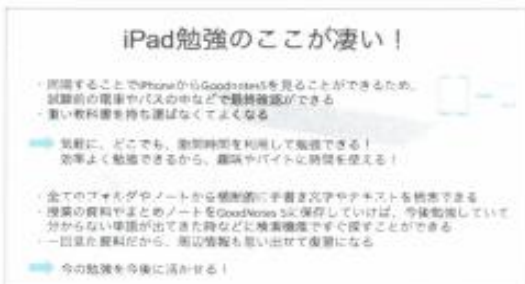
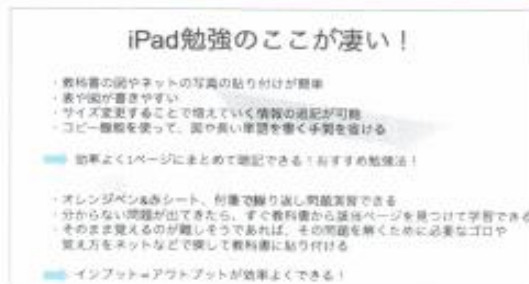
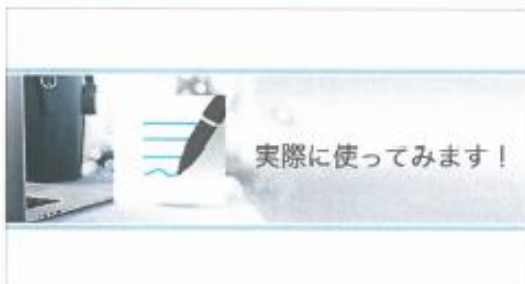
iPad（タブレット）学修の推進

2023/12（調査対象 106名/100%）

2024/12（調査対象 106名/100%）

iPad以外のデバイスを使った学修法は使っていますか？

第1回 2023年7月12日(水) 13時10分から C0201教室にて
 タイトル:「iPadで叶った! 効率&モチベup 勉強法!」
 演者: 薬学部6年 北村優里香さん



デメリットと対処法

| | | |
|----------------|---|--------------|
| コストがかかる | → | 学習を使う、中古品を使う |
| 充電がなくなったら困る | → | モバイルバッテリー常備 |
| Wi-Fiが必須になる | → | スマホでデザイン |
| データが溜め込まれるのが怖い | → | クラウド保存 |
| 音が鳴る | → | ブルーライト対策 |
| 資料を取り込む手順がある | → | PDFをください... |




まとめ

今行っている基礎の勉強を今後に最大限繋げてほしい！

iPadがあれば

- 画像添付などの便利ツールを使って1ページのノートにまとめて暗記する勉強法が効率よく行える
- 授業聴いて過去の勉強を振り返ることができ、知識が繋がる
- インプット=アウトプットの行き来がしやすい
- 大量の教科書やノートを持ち運ばなくていい
- 資料作成やイラスト制作もできる

電子辞書でも勉強が捗るかもだからぜひ参考に、使いこなして！




第2回 9月28日(木) 11時30分から 34202にて
 タイトル:「勉強の質と効率を向上させる iPad 活用勉強法」
 演者:薬学部5年 藤井惇一さん

勉強の質と効率を向上させる
iPad活用勉強法

5年 藤井惇一

勉強の質と効率を向上させる
iPad活用勉強法

a. 目次

1. デバイス
2. アプリケーション
3. iPad vs 紙
4. GoodNotes 5 の機能紹介
5. 授業でのGoodNotes 6 の使いかた
6. まとめ

1. デバイス

iPad Pro
 11インチ
 Wi-Fiモデル
 64GB

Apple Pencil



iPad Pro でなくても、iPad Air / iPad を使っている人も多い

2. アプリケーション

| | |
|--|---|
| <p>GoodNotes 6 ノートアプリの王様 授業、勉強、実験ノートとして活用</p> | <p>TickTick ToDo / タスク管理アプリ やるべきことを見える化</p> |
| <p>Adobe Scan スキャナーアプリ 配布プリントもPDFで読める</p> | <p>ヤクチエ添付文書 医療系添付文書検索アプリ すぐに薬を調べられる</p> |
| <p>Kindle 電子書籍アプリ いつでもどこでも読書</p> | <p>フリーボード (純正) デジタルホワイトボードアプリ 簡単に広がるノートに書き込み</p> |

3. iPad vs 紙

1 使い勝手

44 書きやすさ

紙の方が書きやすいと感じる人が多い
 だが、iPad も工夫すると書きやすくなる
 ペーパーライクフィルムや Apple Pencil を利用すると書きやすくなる




ペーパーライクフィルム
 表面に貼ることで紙のような書き心地になる

3. iPad vs 紙

1 使い勝手

44 ノート整理

iPadの方が圧倒的にしやすい
 書いた内容、大きさ、位置などを自由に編集できる
 インターネットからの写真を貼り付けで図解の作成がしやすいようにまとめられる



ネットからの画像
 貼り付けができる

資料集の紙

3. iPad vs 紙

1 使い勝手

44 複数

ノートがある条件でないと閲覧できない
 紙は楽にする(ノートが楽にくくなる)
 GoodNotes 6 は検索機能が充実、機能的に楽である

| | | |
|--|---|--|
| <p>紙書 1冊あたり1000円</p> | <p>紙冊 1冊あたり1000円、1冊あたり1000円</p> | <p>紙冊 1冊あたり1000円</p> |
| <p>Apple Pencil</p> | | |
| <p>紙冊 1冊あたり1000円</p> | <p>紙冊 1冊あたり1000円</p> | <p>紙冊 1冊あたり1000円</p> |

3. iPad vs 紙

2 持ち運び性

44 負担

紙、紙よりiPadの持ち運び
 iPadは持ち運ぶの負担が重くても重くはない
 重さには大量の資料集も持ち運ぶため、決して重くはない
 重たい荷物で疲れたのがち

44 充電

充電の早いiPadはたまたま
 家で充電しておくorモバイルバッテリーを持ち運ぶ必要あり

3. iPad vs 紙

3 万能性

4 利便性

GoodNotes 6 を iPhone と同期していることでも閲覧ができて、
 印刷の印刷機能、電源移動の機能、更になった機能

支那某館の様に iPad を持ち運び、おからしいことをノートやブック
 として読べて自分のノートに読んだこと、読んだこと
 を書き込みたり、画像やアイコンをダウンロードし、
 編集機能や検索への対応が実現に活かすことができる



3. iPad vs 紙

4 金銭面

4 Money

iPad Air Wi-Fiモデル 64GB 92,800円
 Apple Pencil (第2世代) 19,880円
 GoodNotes 6 4,080円 (買い切り型)

合計 116,760円

残り5年分
 1ヶ月 約1,800円



3. iPad vs 紙

5 ストレージ

4 容量 (GoodNotes 6)

iPadストレージ 17.49GB
 iCloudストレージ 14.8GB

現在: iCloudが容量は 200GB を購入


| iCloudストレージ 価格 (月額) | |
|------------------------|--------|
| 5GB | 無料 |
| 50GB | 130円 |
| 200GB | 400円 |
| 2TB | 1,300円 |

おすすめ iPadストレージ
 用途だけの使用 64GB
 動画、画像が容量 128GB以上

4. GoodNotes 6 の機能紹介

ペンの書き高さ

ペンの種類 (カラー、ボールペン、筆ペン)
 カラーを自由に選択できる
 複数ペン



4. GoodNotes 6 の機能紹介

なぜかわツール

コピー＆ペースト
 読んで読書のスクリーンショット
 手書きメモに実装
 サイズ変更
 カラー変更



4. GoodNotes 6 の機能紹介

ステッカー

お好みのステッカーを添ってスクリーンショット
 好きな画像、手書き文字もステッカーに
 書入れてもできる

簡単にメモ作り



4. GoodNotes 6 の機能紹介

入力モード

Microsoft Word のように入力
 ノート整理、レポート作成が容易に



4. GoodNotes 6 の機能紹介

フォルダー分け

カテゴリごとにフォルダー、ノートを作成できる

検索

手書き文字、テキストを検索

共有

友達にノートも共有
 (同期が必要)



4. GoodNotes 6 の機能紹介

ページ挿入入れ替え


ページを挿入し替えることができる
 ノート整理に便利
 ページのコピー機能



4. GoodNotes 6 の機能紹介

アウトライン

整理ごとに目次を作成
 検索のページに簡単に移動
 作業効率 向上



4. GoodNotes 6 の機能紹介

Split View
2つのアプリを並列に表示することができる
同期機能も1画面でできる



The screenshot shows the GoodNotes 6 interface in Split View. On the left, there is a document with text. On the right, there is a table with columns and rows, demonstrating how two different applications can be used simultaneously.

5. 授業でのGoodNotes 6 の使いかた

- PDFダウンロードは 教科資料を対応
- 授業の内容をノートに書き込む
- 確認内容を検閲から編集
- 教科書の画像なども取り入れてわかりやすくまとめる
- 授業概要を用いて調べる

Additional features mentioned:

- 音声機能あり
- 読み進める際にはコピー＆ペースト
- ノート共有
- PDF - 音声機能に有利

6. まとめ

伝えたいこと

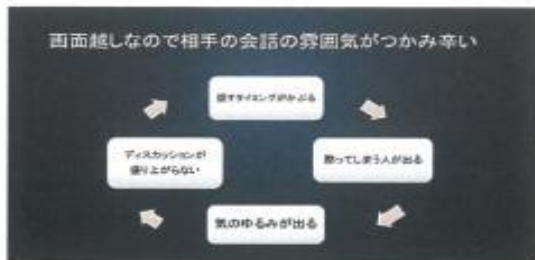
- 自分に合った勉強法を1年生のうちに身につけること
2年生以降暗記する量がさらに増える
自分に合う暗記方法を確立するべし
- 1年留年すれば学費は + 200万円
さらに1年働くのが遅くなり、給料 500万円以上の損
人生においてトータル700万円以上の損害になる
楽しむところと勉強のメリハリをつけてストレートで合格
しよう！

ご清聴ありがとうございました！

ご不明な点は
未来創造部 5F 病態生環・ゲノム機能学研究室 藤井 まで

第3回 11月28日(火)9時10分から
 図書館2階ラーニングcommonsにて
 タイトル:「オンラインディスカッションのあり方」
 演者:メディア・映像学科 廣川依歩希さん、栗山諒也さん

| | |
|---|--|
| <p>情報科教育法Ⅱ 発表</p> <h2>オンラインディスカッションのあり方</h2> <p>302001 元1000 302103 兼1000</p> | <h2>発表の流れ</h2> <ul style="list-style-type: none"> ・オンラインディスカッションについて ・今日の発表目的 ・オンラインディスカッションの問題点 ・問題点に対する対応 ・「ホワイトボード」の活用 ・まとめ |
| <h3>オンラインディスカッションについて</h3> <p>コロナ禍によって、会社や学校でZoomなどのIOTを使ったオンラインディスカッションの機会が増えてきている。これを活用すると、移動のための時間やコストを大幅にカットできたり、環境さえ整えればどこでもディスカッションができるため場所の確保をしなくてよい、リラックスして参加できるなどといったメリットがある。</p> | <h3>オンラインディスカッションについて</h3> <p>しかし、オンラインでのディスカッションをするうえで円滑に議論を進めることのできない問題点がある。そこで、その問題点の中からいくつか選び、何故問題が起こるのか考察し、円滑に議論を進めるための対応を提示し、活用する。</p> |
| <h3>今回の発表の目的</h3> <p>コロナ禍での遠隔授業を通して、オンラインディスカッションをした時発生した問題点を提示し、それに対する対応策を提示する。 また、その対応の中でIOTをどのように活用するかを紹介する。</p> | <h3>オンラインディスカッションの問題点</h3> |
| <h3>オンラインディスカッションの問題点</h3> <ul style="list-style-type: none"> ・機材トラブル ・通信環境が悪い ・議論中気のゆるみができる ・話すタイミングがかぶる ・黙ったまま、話し合いに参加しない人がいる ・マイクをオンにしても聞き取れない ・画面が小さいので顔が見えづらい | <h3>オンラインディスカッションの問題点</h3> <ul style="list-style-type: none"> ・機材トラブル ・通信環境が悪い ・議論中気のゆるみができる ・話すタイミングがかぶる ・黙ったまま、話し合いに参加しない人が ・マイクをオンにしても聞き取れない ・画面が小さいので顔が見えづらい <p>これらの問題の対応を考える</p> |
| <h3>これらの問題についての対応</h3> | <h3>オンラインディスカッションの問題点</h3> <ul style="list-style-type: none"> ・議論中気のゆるみができる ・話すタイミングがかぶる ・黙ったまま、話し合いに参加しない人がいる <p>これらの問題が起こる原因について</p> |



これらの問題についての対応

1. 気のゆるみが出る
 - 話し方や表情、環境に気を付ける
 - ・メリハリをつけた話し方をする
 - ・声のトーンを変える
 - ・一文を短くする

これらの問題についての対応

1. 気のゆるみが出る
 - 話し方や表情、環境に気を付ける
 - ・照明を置いたり、窓の方に向けて産り光を顔に当てるようにする
 - ・カメラの角度と距離に気を付ける
 - ・表情を明るくする

これらの問題についての対応

2. 話すタイミングがかぶる
 - 役割分担をする
 - ・予め話す順番を決めておく
 - ・司会者が話を振る

これらの問題についての対応

3. 黙ったまま、話し合いに参加しない人がいる
 - 役割を与えて話し合いに参加させる
 - ・司会者が指名して発言させる

オンラインディスカッションの問題点

- ・黙ったまま、話し合いに参加しない人がいる
- ・マイクをオンにしても聞き取れない
- ・画面が小さいので顔が見えづらい

これらの問題が起こる原因について

周りの環境や機材トラブルなど外的要因

これらの問題についての対応

3. 黙ったまま、話し合いに参加しない人がいる
 - 話の流れがわかっていない可能性がある
 - ・チャット機能で質問する
 - ・書記の人の画面共有機能で、話した内容のメモを共有する

これらの問題についての対応

4. マイクをオンにしても聞き取れない
 - Zoomの機能を使う
 - ・字幕つける機能をつかう
 - ・ノイズ除去する
 - ・画面共有でメモを共有する
 - ・意見の要点をチャットに書く

これらの問題についての対応

5. 画面が小さいので顔が見えづらい
 - Zoomの機能を使う
 - ・チャットやリアクションなどの機能を活用する
 - ・背景をシンプルなものを選び見やすくする

これらの問題についての対応

- ・話し方や表情、環境に気を付ける
- ・役割分担をする

→対面のディスカッションでも大切な要素

→これらに気を付けることで対面でのディスカッションに近づけることができ、円滑な議論をすることができる

これらの問題についての対応

- ・Zoomのチャット機能や字幕機能を使う
- ・画面共有を使う
- 会話の流れを振り返り、情報を整理することができる
- 会話をまとめたメモやイラストを共有するとイメージが共有でき、議論がしやすくなる

これらの問題についての対応

- ・Zoomのチャット機能や字幕機能を使う
- ・画面共有を使う

これらの機能を有効活用すると、オンラインディスカッションをよりよいものにできる!!

ホワイトボードの活用

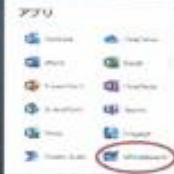
ホワイトボードの活用

Whiteboardとは

- ・ マイクロソフトが提供するデジタル・オンライン・ホワイトボードアプリケーション
- ・ マイクロソフトアカウントさえあれば、誰でも無料で使うことができる

対応する機器

Windows、iOS、Androidに対応したパソコンやタブレット及びスマートフォン



ホワイトボードの活用

実際にホワイトボード
を使ってみる

お手持ちのスマートフォンなどで
こちらのQRコードをスキャンして
参加してください



ホワイトボードの活用

お題「今回の発表を聴いた感想」

良かったところ、悪かったところ、質問など

できるだけたくさん書いてください！

ホワイトボードの活用

- ・ 同時に意見を出し合うことができる
- ・ 出した意見をグループ化してまとめることができる
- ・ 出した意見をもとにして議論を進めることができる
- ・ 議論のもととなる情報が見られるので理解がしやすい

ホワイトボードの活用

- ・ オンラインディスカッションだけでなく通常授業でも
- 事前に意見を出させて、授業ではその意見のまとめだけをする
→ することで、授業時間の短縮が可能となる
- ・ 記録が残るので振り返りがしやすい

まとめ

オンラインディスカッションでは、円滑に議論ができない様々な
問題がある。普段のディスカッションよりも話し方や表情、環境
に気を付けたり、役割分担をしっかりとすることが必要である。
また、それだけでなく、ICTを活用することでオンラインディスカ
ッションならではの諸問題も解決できる。

引用・参考文献

1. 教育ICT活用推進協議会(2017)「教育ICT活用推進協議会」(2017.12.15閲覧) <URL>: <http://www.edict.go.jp/>
2. 文部科学省(2017)「教育ICT活用推進協議会」(2017.12.15閲覧) <URL>: <http://www.edict.go.jp/>
3. 文部科学省(2017)「教育ICT活用推進協議会」(2017.12.15閲覧) <URL>: <http://www.edict.go.jp/>
4. 文部科学省(2017)「教育ICT活用推進協議会」(2017.12.15閲覧) <URL>: <http://www.edict.go.jp/>
5. 文部科学省(2017)「教育ICT活用推進協議会」(2017.12.15閲覧) <URL>: <http://www.edict.go.jp/>

以上です。
ご清聴ありがとうございました。

第3回 11月28日(火) 9時10分から
 図書館2階ラーニングコモンズにて
 タイトル:「授業における動画コンテンツの活用」
 演者:メディア・映像学科 菅萌香さん、栗山諒也さん



動画コンテンツの活用について

近年の教育現場において、パソコンの使用や、タブレットが支給されるなど、情報を簡単に効率的に入手できるようになった。特に、動画の活用においては、授業中に関連動画を視聴したり、授業の様子を撮影し、録画を配信するなど様々な方法が見られる。これらは、新型コロナウイルスの影響でオンライン授業を会場なくされたことで、動画を活用した授業形態が顕著になったと考えられる。

オンライン授業が多く大学の大学で行われるようになり、動画の教育利用は大きく取り上げられることになったが、単に動画を扱うことだけでは学習効果が得られるかはわからない。動画をあくまで教育手段の一つと捉え、動画を含めた一つの授業として作り上げることで学習効果が期待できるのではないかと。

映像の種類

対面授業での動画視聴

「学校に来て教室で視聴する」動画授業は、教育の効率化や情報共有、さらには学習者の理解度向上に大きく貢献している。

【例】理科の実験授業において、教室内で映像を流すことにより、具体的な実験手順を視覚的に生徒に示すことが可能。

遠隔での動画視聴

「家庭など校内以外で視聴する」動画授業は、教育の柔軟性を高め、様々な状況に対応可能な学習環境を提供している。

【例】英語のリスニング教材を動画授業として提供することで、家庭や図書館など自分の好きな場所で、何度もリピートして聞くことができ、学校で理解できなかった部分を自宅で再度視聴し、自己学習を進めることも可能。

授業で取り扱うべき動画内容

事例や活動の様子を動画で視聴する

自分との関連性を見つけることによって、学習が意味のあるものであるという認識をもちもらう。

興味関心が湧くものを選ぶ

授業内容に適切な動画の中でも、興味関心が湧きそうなものを選択することによって、動画の教材としての質を上げる。

教科書ではわかりにくい部分を動画で見せる

文字や写真だけでは分かりにくい学習内容を、動画で見せることによって伝えることができる。

事例や活動の様子を動画で視聴する



興味関心が湧くものを選ぶ

YouTubeにて、教育系動画コンテンツを制作している、著名人などの動画を視聴する



教科書ではわかりにくい部分を動画で見せる

歴史の内容を、アニメや教育番組にて放送されている動画を視聴する

例えば

Zoomにて画面共有しながらの作業

同時に作業ができ、学習者のペースに合わせて授業を進めることが可能

対面授業との差

授業内容によっては遠隔ではないほうが良い時もある

授業での動画の取り扱い方

短い動画を学習活動と組み合わせる

集中力が切れないよう、動画視聴と学習を交互に行うことによって持続力を高める。

授業後でも視聴できるようにする

生徒自身で振り返りや学習ができるように、いつでも見直すことができる環境を準備しておく。

短い動画を学習活動と組み合わせる



授業後でも視聴できるようにする

学校が管理するサイトおよびウェブページなどに動画コンテンツを置いておく

YouTubeにて動画視聴がいつでもできるようにする



その他のメリット

- ・ 見返すことができるためノートを取ることに必死にならずに授業に集中できる
- ・ 休んだ日の授業を学び直すことができる
- ・ 学校に通うのが困難な生徒も同じように教育が受けられる
- ・ 他の生徒や先生の目が気にならない

動画コンテンツの活用例

授業の導入に使用する

実例や活動の様子

まとめに活用する

振り返り用素材

前回の復習

授業の補足情報



考えられる懸念点

- ・ 設備を整える必要がある
学校の授業を撮影して授業動画として配信するには、動画を撮影できる環境を整えなくてはならない。
- ・ 教員のIT関連の知識を底上げする必要がある
授業の風景を動画化して共有するには、撮影・編集・共有などの作業を教員がこなさなくてはならない。

考えられる注意点

- ・ セキュリティやプライバシーに配慮する必要がある
外部の人が動画を視聴できないようにするなど、セキュリティやプライバシーへの配慮も必要になる。
- ・ 動画は安全か
授業で流した動画が違法であった、そのため著作権法に引っかかってしまったということのないよう、利用する予定の動画サイトの規約を確認する。

まとめ

- ・ 動画コンテンツの活用は、学習者の理解度向上や主体性を育むことに役立つ
- ・ 学校の授業における動画の活用は、今後ますます欠かせなくなっていく
- ・ 今の段階から試験的に活用を開始し、ノウハウを蓄積しておくべき



6 未来創造館が掲げる“CROSSING※1”な学びを実現する、学生間相互学習支援システムの研究開発

所 属 大学教育センター
職 名 講師
氏 名 前田 吉広

(成果の概要)

本取り組みは、キャリア教育科目を受講した学生有志が集い、活動する自主ゼミ（キャリアデザインゼミ）の運営及び組織に関する課題を“ピアコーチング理論”を用いて解決することを目的としたものである。自主ゼミに所属する約25名のメンバーは、2023年4月～2024年1月までの約10ヶ月間、ピアコーチングのオンライントレーニングプログラム「PEER+」と振り返り・ビジョン導出合宿に取り組み、コーチングスキル（社会人基礎力における「チームで働く力（主に、傾聴力、発信力、柔軟性、ストレスコントロール力）」）の向上に努めた。

結果として、自主ゼミ所属メンバー間のコミュニケーションの活性化につながったことに加え、期待していた自主ゼミ運営のスムーズな引き継ぎも達成された。更に、本取り組みの実施前後における社会人基礎力の変容に関しても肯定的な変化が見られた。それらの詳細について、以下に報告する。

① 所属メンバーのコミュニケーションの活性化

「PEER+」を用いたコーチングプログラムに取り組むペアは、自主ゼミのリーダー（学部4年生 ※当時）の協力を得て、普段話すことの少ないメンバー同士（例：学年・学部が異なる）で、且つメンバーの価値観や個性を考慮して組み合わせることが功を奏した。

1年生からは、「将来に対する先輩の目標が明確で、就職に関することや海外研修のことなど、どちらも自分を成長させてもらえる話を聞いて、とても濃い内容の時間だった。」「先輩から自分では気づけない強みを見つけてもらった。自分をもっと知る必要があると思いました。」「1つ年上の先輩がこれほど経験しているのに、自分はまだ何もできていないと不安を感じたことがきっかけで、学外のイベントに参加したらたくさんの学びや楽しさに気づいた。」といった意見が数多く見られ、学年・学部を超えたコミュニケーションによって新たな関係性が構築できたと共に、後輩の気づきや成長に対しても一定の効果があつたと考えられる。

また、振り返り・ビジョン導出合宿での団体行動やグループワークにおいても、ピアコーチング「トレーニングプログラム①（6月～8月）」をおこなったペアの親密度が高まっている様子が見られた（※写真参照）。これらのことから、本取り組みにより自主ゼミ内のコミュニケーションの活性化につながったと考えることができる。



写真：合宿2日目の昼食の様子

② 自主ゼミ運営のスムーズな引き継ぎ

2年以上の間、自主ゼミのリーダーを担ってきた4年生が2024年3月に卒業を迎えるため、2023年度内にリーダーの役割を後輩に滞りなく引き継ぐことが、自主ゼミ活動の大きなテーマの一つだった。9月中旬に開催した「振り返り・ビジョン導出合宿」での意見交換を皮切りに、自主ゼミの新体制に向けた意見交換が定期的におこなわれ、1ヶ月後の10月中旬に新しいリーダーへの引き継ぎ会が開催された。2023年度は自主ゼミのメンバーが大幅に増えたこともあり、これまでの1名リーダー体制では負担が大きいという意見が出たため、2,3年生からそれぞれ1名のリーダーが選出され、2名リーダー体制で運営をおこなうことに決定した。このように、組織の現状や課題に基づき、従来の取り決めにとらわれず、新しい運営体制のあり方を導き出すことができたことについても、今回のピアコーチングによるコミュニケーション力の向上が寄与しているのではないかと考えられる。



写真：リーダー引き継ぎ会の様子

③ 実施前後における社会人基礎力の肯定的な変化

PEER+活用にあたっては、事前事後に自己開示の受けやすさに関するオープン・スケールと社会的スキルの度合いを見るKiSS-18の2つの尺度からなる質問紙による調査と、終了時に「気づき」「心地よさ」「難しさ」「その他」の4つの設問で自由記述式の振り返りを求めたアンケートに回答してもらった。その結果、PEER+活用の1巡目時点においては、オープン・スケールでは前後で差が見られなかったが、KiSS-18では事後が有意に高かった。その後2巡目を終えた段階では、オープン・スケール、KiSS-18ともに有意に高い結果となった。

次に事後の自由記述を社会人基礎力の12の能力要素を利用して分類を行った。その結果、チームで働く力から「傾聴力」「状況把握力」「発信力」「ストレスコントロール」、その他の2つから「課題発見力」に関わる振り返りが複数抽出された。

今回のプログラムで育成を目指すチームで働く力は、主に他者とのコミュニケーションに関わる能力が多い。オープン・スケール、社会的スキルについて有意な結果がでていることや、他者の話を丁寧に聴く「傾聴力」や自分のことを知ってもらうための「発信力」、そのプロセスで自己・他者について深く理解をしていく「状況把握力」などに関係する振り返りが複数抽出されていることから、ピアコーチングを通して、対人関係構築に関する知識や技能を身につけたことがうかがえる。また対人関係構築の難しさを、コミュニケーションのスキルを活用することや、自分や他者が抱える課題を明示化することで乗り越えようとする振り返りが多いことから、「課題発見力」「ストレスコントロール力」などにも一定の効果があったと考えられる。

(振り返り・ビジョン導出合宿 実施日：9/11～12)

当初の計画通り、9月上旬に休暇村帝釈峡を会場に東京からコーチェット社の櫻本社長を招き、合宿形式での研修・グループワークを実施した。



写真：振り返り・ビジョン導出合宿の様子

■研究報告

- ・日本教材学会 第35回研究発表大会 (10/21～22)
テーマ：ピアコーチングをベースにしたオンライン教材の活用 ― 社会人基礎力育成を志向して ―
研究発表者：内垣戸貴之 (メディア・映像学科 准教授)

■活動報告

- ・コーチェット：「PEER+」利用者インタビュー
2023. 10. 11 ピアコーチングによる「コミュカ向上プロジェクト」
<https://peerplus.jp/article/02>
- ・福山大学：学長室ブログ
2023. 09. 22 【大学教育センター】キャリアデザインゼミ『振り返り・ビジョン導出合宿』に行ってきました！
<https://www.fukuyama-u.ac.jp/blog/87523/>

7 学生と市民が協力した身近な海洋環境の保全と啓発展示の実施

所 属 生命工学部 海洋生物科学科
職 名 講師
氏 名 水上 雅晴

(成果の概要)

本活動では、海洋生物科学科の学生が中心となって活動する学友会海洋生物研究会の部員を主体に、令和4年度までの活動実績を元に福山市や地元市民団体と手を取り合い、令和5年度には本助成を受けて以下5つの活動を実施しましたのでご報告いたします。

【実施した活動の概要】

① 令和5年度第1回因島生物調査と展示資料の収集

令和5年5月20日(土)に1~3年生の計52名の部員が参加して、因島キャンパスにて因島の海岸に生息する生物調査を実施した。併せて海岸の清掃活動も行い、6および8月に計画する福山市リサイクルプラザでの展示準備に向けた新入部員と先輩部員の交流機会となった(2023年6月1日の学長室ブログ参照)。

② 福山市リサイクルプラザでのパネル展示

令和5年6月18日(日)~25日(日)に、ごみの減量・リサイクルに向けた体験的な啓発施設としての役割を果たす「福山市リサイクルプラザ(福山市箕沖町)」にて、無人型の環境啓発展示を実施した。展示内容は海洋ごみや外来種が身近な環境に及ぼす影響を考えることができるようにするとともに、子どもたちにも4コマ漫画イラストやクイズ形式で海洋生物に関心を持ってもらえる工夫を凝らし、環境問題や外来種の問題について学び、一人ひとりが責任をもって行動するよう、来場者に呼び掛けた(2023年6月19日の学長室ブログ参照)。

③ 第2回松永湾清掃活動

令和5年7月16日(日)に1~3年生の25名の部員が参加して、松永浄化センター南側の干潟で約3時間の清掃活動を行った。令和4年度同様「環境市民ネットまつなが」との共同開催で2年連続の活動となったが、回収したゴミは車のタイヤ、炊飯器、水槽セットなどを含めて大型のゴミ袋11袋分となった。そのようなゴミの多く見られる環境でもハクセンシオマネキなどの貴重な生き物がたくましく生きる姿を多く観察でき、部員からは活動継続の重要性について多くの声が上がった。活動当日は新聞取材を受け、7月17日の山陽新聞、7月18日の毎日新聞に活動内容が掲載された(2023年7月23日の学長室ブログ参照)。

④ 福山市リサイクルプラザでの環境啓発イベントの開催

令和5年8月11日(金)~13日(日)に、6月にも展示活動を実施した福山市リサイクルプラザにて「水圏環境啓発展示-外来生物企画展~水辺のよそ者博~」と題した、外来種や在来種の生体展示、部員による解説、特徴や日本の環境に与える影響を解説した自作パネルの展示を開催した。また、子ども達を対象とする催しとして、海や河川、湖沼など水辺に生息する生き物の色・形・模様の特徴を知り、自由にペイントして作る「プラ板制作」や「ぬりえ」も行った。展示期間中は合計16名の部員が参加し、シフトを調整して1日あたり9名の部員が展示の解説やプラ板制作・ぬりえのサポートを行った。3日間の展示で163名の来場者があり、中には2日間連続で遊びに来たご家族もみられた。展示作製の裏側では多く

の手書き解説パネル、生体の採集、イラストの制作などそれぞれの得意な点を活かし、サポートし合った部員の努力もあって素晴らしい展示に仕上がり、部員間で支え合いながら、個人のスキルアップや仲間との協力ができたという声が聞こえた（2023年9月2日の学長室ブログ参照）。

⑤ 第6回備後フィッシュフェスへの出展

令和6年11月3日に福山駅北口「ふくやま美術館前広場」で開催された第6回「備後フィッシュ&備後福山ワインフェス」において、タッチングプールおよびおさかなトラック水族館の解説員、プラバンキーホルダー作りを担当した。学芸員資格取得を目指す3年生3名が参加し、博物館実習を履修する4年生3名と一緒に、準備から開催に至るまで学生が中心となって取り組んだ。当日の会場には4,000名の来場があり、子どもたちの喜ぶ声が一日中耳に届く雰囲気は、開催第6回目に当たる今回が初めてで、プラバンキーホルダーコーナーには400名の参加者が集まった。当初の計画には無い活動であったが、これまでの学生たちのアウトリーチ活動が話題となり発展したもので、主催者である福山市や水産関係者をはじめ多くの方々から感謝の声を頂いた（2024年1月6日の学長室ブログ参照）。

令和5年度の活動計画にあった「学内成果発表会」に関しては、環境市民ネット松永や福山市環境総務課との日程調整が困難で、開催に至らなかったが、関係者からは「これまでの担当者だけでは発想できないような、若い学生達の視点からの啓発活動はとても新鮮で、今後も一緒に活動を発展させていきたい」などのコメントをいただいています。

以上のことから、海洋生物をキーワードに学ぶ学生たちが幅広い年齢層の地域住民と共に海洋環境の啓発活動を行う事で、次世代へと繋げる地域活性化のサイクルを派生させると同時に、魚離れの改善や身近なSDGsの実践など、福山大学の取り組むグリーン&ブルー人材を育成することを目標とした本活動は概ね目的を達成でき、福山大学のホームページや各種メディアからの情報発信を介して広く周知できたものと考えます。

8 サイバー防犯教室の対象拡大と広報啓発活動における発信力強化

所 属 人間文化学部 心理学科
職 名 准教授
氏 名 大杉 朱美

(成果の概要)

1. 本課題の背景

福山大学サイバー防犯ボランティア CyPat FU（さいぱつとえふゆー）は、昨年度時点で心理学科の1年生から4年生まで合計26名が参加する団体であり、広島県警察本部生活安全全部サイバー犯罪対策課から委嘱を受けたメンバーが、インターネット空間で未成年者が犯罪に巻き込まれるのを防ぐための活動を行っている。コロナ禍を通じて未成年が SNS に触れる機会が増え、サイバー空間を通じて犯罪被害に遭う可能性が増加したと言われていた令和3（2021）年度から活動を本格化し、毎週1回の定期活動の他、不定期の学外活動も実施している。いずれの活動も、広島県警よりボランティアリーダー（監督者）として委嘱を受けた本申請者が同席し、学生の活動をサポートするとともに、活動内容の把握と環境づくりに努めている状況である。

活動は、主として X（旧 Twitter）上でのサイバーパトロール、Instagram における広報啓発活動、地元小学校や施設におけるサイバー防犯教室の実施である。サイバー防犯ボランティア団体自体は他大学にも存在しており、それぞれがサイバーパトロールを行っているところではあるが、活動の頻度は CyPat FU が群を抜いており、県警ホームページで幾度となく紹介されている。昨年度は、警察庁サイバー警察局のホームページで CyPat FU の取り組みが紹介されるとともに、CyPat FU のサイバー防犯教室の様子を撮影した写真が同局のパンフレット「サイバー空間の安全・安心のために」に採用される等、全国的にも注目される団体となっている。日頃から県警と密接に連携を取っていること、広報啓発活動として Instagram を利用していること、心理学科の学生で構成され独自の視点から活動していることも、高く評価されている。2021 年度は模範活動団体として青少年健全育成成功労者等県知事賞、社会活動部門の学長賞を授与された他、2022 年度に開催された警察庁の広報啓発コンテストに応募した動画が「ランサムウェア対策部門」で審議官賞（優秀作品）を受賞した。広島県内の防犯連合会等からも問い合わせがくる等、今後更に活動の場を広げ、サイバー防犯活動を推進することが求められている。

2. 本課題の目的

更なる活動を展開するため、令和5年度の助成金申請においては、以下の2点の課題を解決することを目的とした。

1点目は、サイバー防犯教室の対象拡大である。これまで CyPat FU によるサイバー防犯教室は小学生対象のものに限られていたが、当然ながらサイバー犯罪の被害者には小学生だけになるわけではない。地域のサイバー犯罪を少しでも減らすためには、より広い年齢層を対象としたサイバー防犯教室の実現が求められていると言える。特に、自ら情報を求めることのできるいわゆる Z 世代と言われるような中高生と異なり、インターネット社会に苦手意識を持ちつつも利便性を求めて SNS 等の活用を始めたようなシニア世代には、高額詐欺やウイルス感染等のトラブルのリスクが潜んでいる。実に80%のシニア世代がその使用に不安を感じている（総務省、2022）という現状を鑑みれば、孫世代に近い大学生とともにその不安を払しょくし、シニア世代の被害を防止するサイバー防犯教室を実現させること

は、大きな社会貢献になり得る。具体的には、サイバー防犯教室内でシニア世代が自ら詐欺被害を回避できる行動をシミュレーションしたり、サイバーパトロールを体験したりできるように、サイバー防犯教室時のグループワーク用タブレット端末等を整備し、実践型の防犯教室を開催することを目指した。

2点目は、広報啓発活動における発信力強化である。CyPat FUは広報啓発活動にも力を入れており、Instagramにおいて多くの人が児童の性的搾取や詐欺等のサイバー犯罪被害に遭わぬよう防犯標語の発信をすでに行っている他、2022年度は警察庁の広報啓発コンテストに参加するため動画作成を行ったことは前述のとおりである。初めての動画作成で大きな賞を受賞することとなったが、同時に動画作成における新たな課題も見つかった。2022年度は動画作成に必要な機器の多くは教職員や学生の私物に頼っており、メンバー間での共有や作業の引継ぎも一部困難であったと言わざるを得ない。2023年度も同様のコンテストに参加予定であった他、CyPat FU自体のYoutubeチャンネルの開設も目指したことから、動画作成に必要なツールをさらに整備し、画像や音声、音楽編集等を学生皆で共同で行える環境を整備することを目指した。

3. 本課題の成果

令和5（2023）年度、CyPat FUは以下のような活動を実施し、課題の解決を実現させた。2つの目的別の成果は以下の通りである。

(1) サイバー防犯教室の対象拡大

これまで小学校5、6年生のみを対象としたサイバー防犯教室しか実施してこなかったCyPat FUであるが、2023年度は以下の3つの新たな対象を拡大した。

① 小学4年生対象のサイバー防犯教室の実施

インターネット上のトラブルは、今や高学年だけの問題ではなく、低年齢化していると言わざるを得ない。タブレットを小学生全員が配布されている現状では、インターネットの正しい使い方を早い段階でしっかりと学んでおくことがとても重要である。2023年7月10日に福山市立遺芳丘小学校で実施したサイバー防犯教室は、従来の小学5年生、6年生対象の教室の他、小学4年生向けの教室も行い、3時間連続での教室となった。

理解力、経験値ともに高学年の児童より低いと想定される4年生に対し、いつも以上の練習と、内容と表現の工夫を施した講義を実施し、結果的に好評を得たことは大きな成果である。また、防犯への意識付けのために後半に実施しているアクティブ・ラーニングとして標語作りにおいても、目線を合わせたサポートを行うことができた。

Figure 1

小学4年生向けサイバー防犯教室の様子



※ 詳細は、以下でも報告している。

学長室ブログ1（2023.10.27）

【心理学科】ボランティア前期活動報告第四弾！遺芳丘小学校での防犯教室！

② シニア世代対象のサイバー防犯教室

2024年2月4日には、福山西警察署と協働で赤坂学区の防犯研修会に参加し、防犯組合員や「福祉を高める会」の皆さんに対し、シニア向けのサイバー防犯教室を行った。高齢者が特殊詐欺の被害に遭いやすいことは周知されているが、インターネットを介した詐欺被害も多く、見過ごすことのできない大きな問題である。CyPat FUは参加者が実際に体験しながら詐欺の手口を学べるよう、助成金で購入したタブレット端末を用いたアクティブ・ラーニングが行えるグループワークを考案し、実践的な教室を実現させた。

教室では、後述の警察庁の広報啓発コンテストでも題材となった「サポート詐欺」について講義を行った後、実際に大きな警告音の響く警告画面が出た際に、それに対しどう対処すべきかの練習を参加者自身が体験するワークを行った。インターネットや関連機器に苦手意識の高いシニア層にもわかりやすく、そして楽しみながら学んでいただけるよう工夫し、結果的に各グループで大いに盛り上がる教室となったことで、CyPat FUの学生も大きな達成感を味わった様子であった。

Figure 2

購入したタブレット端末によるシニア向けサイバー防犯教室の様子



※ 詳細は、以下でも報告している。

学長室ブログ 2 (2024. 3. 29)

【心理学科】後期ボランティア活動報告第4弾！(CyPat FUが新たな2つの挑戦+α！)

③ 中学生対象のサイバー防犯教室の実施

2024年2月16日には、福山市立鞆の浦学園においてサイバー防犯教室を実施した。鞆の浦学園は小中一貫の義務教育学校であり、依頼は後期課程の7年生から9年生、すなわち中学1年生から3年生を対象としたサイバー防犯教室の実施であった。初めて中学生を対象とするサイバー防犯教室を実施する上で、適切に難易度を上げるためにどうすべきか考えた結果、従来の標語作りに代わるグループワークをすることとした。そこでは、様々な事例を用意し、その事例において「起こり得るリスク」とどうすればよかったのかという「適切な対処法」を挙げるのが課題であり、結果的に多くの中学生が真剣にワークに取り組む姿が見られた。

活動は鞆の浦学園の広報にも掲載され、好評をいただくとともに、CyPat FUのメンバーにとっても有意義な機会となった。中学1年生から3年生までの多くの参加者をファシリテートするため、本サイバー防犯教室には大学1年生から4年生まで含め10名以上のメンバーが参加した。各自の役割を十分に認識しながら協力して対応する姿が見られ、次年度への引継ぎも意識しながらの実施となった。

Figure 3

中学生向けのサイバー防犯教室の様子



※ 詳細は、以下でも報告している。

学長室ブログ 2 (2024. 3. 29)

【心理学科】後期ボランティア活動報告第4弾！(CyPat FUが新たな2つの挑戦+α！)

なお、従来通り小学5, 6年生を対象としたサイバー防犯教室も実施しており(7月20日と9月28日), 2023年度は合計で2校の小学校に対し5件, 1校の小中一貫校に対し1件, 1つの地域防犯組合に対し1件, 合計で7件のサイバー防犯教室を実施した。

Figure 4

小学6年生向けのサイバー防犯教室の様子



※ 詳細は、以下でも報告している。

学長室ブログ 3 (2023. 9. 26)

【心理学科】ボランティア前期活動報告第三弾！西藤小学校での防犯教室です！

(2) 広報啓発活動における発信力強化

発信に関する成果として、以下の3つが挙げられる。

① 警察庁広報啓発動画コンテストへの出場

2023年度も、前年度に続き警察庁の主催する広報コンテストに出場し、予選通過を果たした。2023年度の広報啓発コンテストのテーマは「ID・パスワードの設定と管理」と「サポート詐欺対策」であり、CyPat FUは「サポート詐欺対策」に関する動画を作成し、応募した。30秒ほどの動画を作成するために、キャラクターの考案、作画、構成の検討、音声の録音に至るまで多くの時間と労力を費やした。結果的に、「サポート詐欺対策」を「警告出ても慌てん」「電話は絶対かけん」「遠隔操作アプリを入れん」「請求されても払わん」「何が何でも従わん」の、5つの「ん」が大事であると端的に伝えリズムカルな動画を完成させた。

上位2団体におくられる賞は2023年度は逃したものの、予選通過は全国で10団体のみであり、県内ではCyPat FUのみであったことを考慮すれば、十分にたたえるべき成果であったと考える。

Figure 5

警察庁広報啓発コンテストに向けた動画作成の様子と作成した動画画面



※ 詳細は、以下でも報告している。

学長室ブログ 4 (2024. 2. 19)

【心理学科】警察庁サイバー警察局の広報啓発コンテストに出場中！（県警音楽隊イベントでの広報活動と県警との対話会）

② Youtube チャンネルの開設

Youtube チャンネルを開設し、ページやアイコンの整備をした。サイバー防犯に関連した様々な動画を作成し、順次公開する予定としていたが、前記コンテスト等に力を入れたこともあり、2023 年度は開設に留まった。

Youtube における広報は今後の課題であるが、広島県警のサイバーチャンネルでは、CyPat FU や CyPat FU が作成したキャラクターが度々紹介されており、県警と連携しながら引き続き努力したい。

Figure 6

Youtube チャンネルのトップページ画面



③ その他の広報啓発活動

福山市役所若者・くらしの悩み相談課や広島県警察サイバー犯罪対策課と協働で、様々なイベントにおける広報啓発活動を実施した。

2023 年 5 月 27 日と 28 日には、福山市役所若者・くらしの悩み相談課と協働でブースを出展し、子どもの安心安全なまちづくりのための広報啓発活動を行った。2023 年 11 月 3 日に開催されたふくやま子どもフェスティバル 2023 においても、福山市役所若者・くらしの悩み相談課と協働でブースを出展し、こどもに防犯を呼びかける活動を行った。いずれも未就学児を含めた多くのこどもの参加があった。

2023 年 11 月 26 日には、広島県警察音楽隊のザ・メイプルウインズのイベント「昼のコンサート」において、広島県警察サイバー犯罪対策課とともにサイバー防犯に関する広報活動を行った。また、2024 年 3 月 3 日には、広島県警サイバー犯罪対策課主催のヤマダデンキ福山店におけるサイバー防犯セミナーに際し、チラシを配布しながらサイバー防犯を呼びかけた。

Figure 7

福山ばら祭における広報啓発活動の様子



※ 詳細は、以下でも報告している。

学長室ブログ 5 (2023. 7. 25)

【心理学科】 ボランティア前期活動報告第一弾！福山ばら祭で防犯イベントを実施！

Figure 8

ふくやま子どもフェスティバル 2023 における広報啓発活動の様子



※ 詳細は、以下でも報告している。

学長室ブログ 6 (2024. 2. 2)

【心理学科】 ボランティア後期活動報告第 2 弾！（地域とボランティア講義での活動紹介とふくやま子どもフェスティバルへの参加）

Figure 9

広島県警主催のイベント「昼のコンサート」における広報啓発活動の様子



※ 詳細は、以下でも報告している。

学長室ブログ 4 (2024. 2. 19)

【心理学科】 警察庁サイバー警察局の広報啓発コンテストに出場中！（県警音楽隊イベントでの広報活動と県警との対話会）

Figure 10

広島県警とヤマダデンキ主催の防犯セミナーにおける広報啓発活動の様子



※ 詳細は、以下でも報告している。

学長室ブログ 2 (2024. 3. 29)

【心理学科】後期ボランティア活動報告第4弾！(CyPat FUが新たな2つの挑戦+α！)

(3) その他の成果

2023年11月2日には、「令和5年警察白書」の第3章(p.118)に、CyPat FUのサイバー防犯教室の様子を撮影した写真がサイバー防犯ボランティアの例として掲載された。また、同月30日には、地元福山西警察署の方々との対話会が開かれ、サイバー防犯に関連した活動の紹介と今後の活動の連携について話し合われた。

Figure 11

「令和5年警察白書」第3章(p.118)に掲載されたCyPat FUの写真

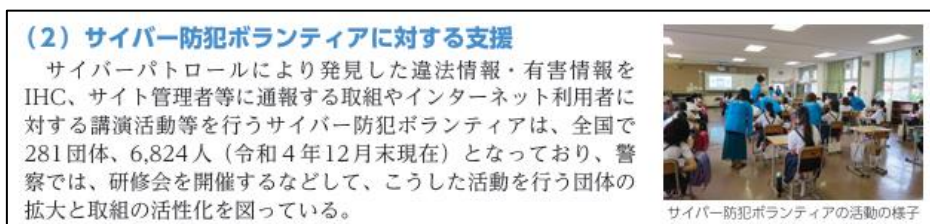


Figure 12

広島県福山西警察署の方々との対話会の様子



※ 詳細は、以下でも報告している。

学長室ブログ 4 (2024. 2. 19)

【心理学科】警察庁サイバー警察局の広報啓発コンテストに出場中！(県警音楽隊イベントでの広報活動と県警との対話会)

2024年1月25日には学長賞(社会活動部門)を受賞し、2023年度の代表と副代表が表彰式に参加し、その様子を多くのメンバーが見守った。その後2024年2月10日に開催された「サイバーセキュリティ・カレッジ in 広島」及び「令和6年度サイバー防犯ボランティア委嘱式」では、2023年度も継続して活動を行う学生に対し委嘱状が交付された他、令和5年度のCyPat FUの活動に対し、広島県警サイバー犯罪対策課長からの感謝状が授与された。

Figure 13

学長賞（社会活動部門）及び県警サイバー犯罪対策課からの感謝状の授与



※ 詳細は、以下でも報告している。

学長室ブログ 2 (2024. 3. 29)

【心理学科】後期ボランティア活動報告第4弾！（CyPat FUが新たな2つの挑戦+α！）

学生の主体的な活動を通じて、多くの学生が多くを学び、自身の成長を実感している様子である。最新のサイバー犯罪対策の知識、正しいSNS利用のスキル等の習得、県警と活動することに対する使命感、小学校等他機関からの依頼に真摯に答える責任感、多くの人と接する中で培われるコミュニケーション能力等が身についたことは、目に見える成果と言える。また、2023年度卒業生には、卒業後広島県警察に採用される学生が2名、島根県警察に採用される学生が1名いる他、子どもに関わる仕事、防犯や警備に関わる仕事に就くものが多数いる。卒業後の進路に大いに生かせる多様なスキルを身につけた学生ばかりである。社会貢献活動として、実際のサイバー犯罪被害を未然に食い止めることが可能であるのみならず、地域社会に対する防犯の意識づけ、正しい情報の伝播による個人のサイバー犯罪に対する抵抗力の増加等、様々なポジティブな影響も大いにあったといえる。

4. 次年度の課題

令和5（2023）年度も精力的に活動し、多くの成果を上げたと言えるであろう CyPat FU であるが、残された課題もある。今後の課題として3点挙げておきたい。

1点目は、動画作成についてである。Youtubeチャンネルの開設に至ったものの、十分なコンテンツの作成、配信には至らなかった。広報啓発コンテストにおいても、予選通過を果たしたことは一定の成果と言えるが、受賞を逃したことも事実である。動画編集等のスキルは他のIT系団体に劣ることは致し方ないが、他のどのような努力で今後の進展ができるかは、学生と引き続き相談しながら検討したい点である。

2点目は、防犯教室の効果検証の論文化が実現していないことである。質問紙調査は実施したものの、学術的なデータとして公表するには至っていない。論文化し、投稿、公開されることにより、更なる社会貢献を目指したいと考える。

3点目は、参加学生の意欲向上と活動の質の維持・向上についてである。多くの学生が参加し、協力しながら積極的に活動している本団体ではあるが、学生の意欲のばらつきや学習深度の違い、準備や練習への参加経験の違いが、活動の質に大きく関連する。よりよいサイバー防犯教室の提供や、よりよい広報啓発活動の実現を考えれば、参加学生の参加意欲、学習意欲向上は必須である。どのような形で叶うかを教員側が考え、影ながらサポートすることは社会貢献として重要なことであり、引き続き努力したい点である。

5. 本課題の実施者

大杉 朱美 准教授（代表者）

濱本 有希 元助手（分担者）

9 地域安全マップ作製指導員のネットワーク構築の試み

| | |
|-----|-------------|
| 所 属 | 人間文化学部 心理学科 |
| 職 名 | 助手 |
| 氏 名 | 濱本 有希 |

(成果の概要)

1. 本課題の背景

地域安全マップとは、子どもたちに「犯罪が起こりやすい場所」と「犯罪が起こりにくい場所」を理解させ、危険回避能力を向上させることを目的とした活動である。具体的には、事前講義、フィールドワーク、マップ作り、発表会という流れで1日かけて行う体験型の学習プログラムとなっている。このプログラムは、犯罪機会に関する知識、統率力、コミュニケーション能力を備えた指導員を中心にして行われる。専門知識やプログラムへの習熟、人手が必要となるため、小学校でこのプログラムを担当教師単独で実施することは困難であった。

そこで広島県では、2005年から地域の大学生を指導員として養成している。2006年には、広島県内の6つの大学（福山大学、広島経済大学、安田女子大学、呉大学、県立広島大学、広島大学）で活動している大学生によって、地域安全マップ作製指導を行うボランティアグループPACEが発足し（申請者が初代会長）、福山大学にはPACE福山支部が設置された。そして、2007年には、地域安全マップの提唱者である小宮信夫教授の研究室の学生を中心とした地域安全マップ協会が発足した。PACE発足時には、PACE福山支部の構成員は心理学科の学生であったが、他大学では、教育学部やメディアビジネス学部など、専門分野が異なっていたこともあり、支部ごとに得意なことを活かし、作成した教材の共有や、開催するイベントの相談・応援など、積極的な交流によって、お互いの指導の質を向上しあっていた。

さらに、PACE福山支部では、地域安全マップの提唱者である小宮信夫教授やその指導を直接受けている地域安全マップ協会とも定期的に交流をしており、最新の情勢に応じた指導方法についての情報を得るだけでなく、日本全国で開催されている地域安全マップ作製セミナーと一緒に参加することで、意見交換やお互いの技術を学んできた。

このように、PACE福山支部は、他の団体との定期的な交流を行うことにより、指導技術の質や指導員の継続のモチベーションを維持してきた。

ところが、後継者の育成が困難であるという課題により、PACEとして活動を現在まで継続しているのは、PACE福山支部のみであり、広島県内で他大学の学生とボランティア活動を通して交流するということが、困難になっている。さらに、新型コロナウイルスの影響により、日本全国で開催されていた地域安全マップ作製セミナーのほとんどが中止となり、地域安全マップ協会との交流さえも途絶えてしまっている。

申請者は、昨年度本学に着任して以降、新型コロナウイルスにより途絶えかけていた、PACE福山支部による地域安全マップ作製指導の活動を再始動させることに尽力してきた。これにより、教員による最低限のサポートのみで、学生を中心として活動を実施できるという状況を作ることに成功している。そのうえで、申請者は、この活動を学生主体とした活動として継続・発展させていくため、福山大学の心理学科内で完結するのではなく、他大学、他学部の学生との交流が有効であると考えている。そこで、まずは、PACE福山支部の学生と地域安全マップ協会という団体の構成員とを繋ぐことで、共に学び成長できる関係を構築したい。地域安全マップ協会は、立正大学文学部社会学科の学生を中心に活動している。

2. 本課題の目的

本申請課題の目的は、地域安全マップ作製指導員のネットワークを構築することである。現在、PACE 福山支部のメンバーは、先輩ではなく、教員である申請者から地域安全マップ作製に関するノウハウを受け継いでいる。そのため、何か困ったことがあった場合には、学生はすぐに教員に相談しており、「先生が言うから間違いない。」「先生に言われた通りにしておけばよい。」という思いが少なからず存在しているのではないかと感じている。しかし、学生主体の活動として軌道に乗せるためには、学生同士、指導員同士で情報交換を行い、問題解決ができることが望ましく、さらには、本活動の目的である場所に潜んでいる様々な安全や危険な要素を見つけるためには、多くの意見やアイデアを出し合い、お互いに知識を深めていくことが非常に重要である。そこで、他のボランティア団体とのスムーズな情報交換ができる環境を整えることで、自分たちとは異なる環境で知識を習得しているメンバーとの交流により、新しい視点を得ることができ、知識を深めることができる。つまり、地域安全マップ作製指導の質が向上するという実利性がある。これに加えて、自分たちの活動をわかりやすく紹介することや、相手の活動について詳しく理解していくことにより、社会的スキルやコミュニケーション能力の向上が期待できる。これらの能力は、学生が今後直面する就職活動やその後の社会活動において、非常に役立つものである。

3. 本課題の成果

令和5(2023)年度、PACEは以下のような活動を実施し、課題の解決を実現させた。2つの目的別の成果は以下のとおりである。

(1) Zoomを用いたオンライン研修

従来、地域安全マップの指導員育成のためには、長時間の研修が必要とされてきた。その主な理由として、実際にフィールドで子どもたちと一緒に犯罪が起りやすい場所や起りにくい場所を探す際に、専門知識を用いて解説をしなければならない点があげられる。フィールドでは解説する対象が常に異なるため、暗記では対応しきれないことや、理論の本質を理解しておくことが求められている。これまでは、このような理解をフィールドワークの経験の積み重ねの中で形成してきた。

本申請課題では、地域安全マップ協会によるオンラインによる研修会を受講することで、これまで申請者による研修によりPACE福山支部では未だ経験したことのない複数の講師による視点や解説の方法を学ぶことができた。普段の定期活動の中で行ってきた研修では得られない視点から街並みを見ることができ、参加したPACE福山支部の指導員の理解が促進された。

(2) 東京で開催される地域安全マップ養成セミナーへの対面参加

実際に、東京で開催される地域安全マップ協会が主催する「地域安全マップ作製指導員養成セミナー」に参加した。このセミナーには、PACE福山支部の学生メンバー6名と引率者として申請者が同行した。具体的なタイムスケジュールは以下の通りであった。

地域安全マップ作り研修会(1日目)

- 13:00-13:15 PACE福山支部による活動紹介
- 13:15-14:15 事前講義(子ども向け)
- 14:20-14:55 講義に関する質疑応答
- 15:00-16:30 フィールドワーク
- 16:30-17:30 コメント書きと添削

地域安全マップ作り研修会（2日目）

- 9:00-9:15 PACE 福山支部による活動紹介
- 9:15-10:15 事前講義のポイント
- 10:20-11:20 フィールドワークのポイント
- 11:30-12:10 マップのポイント・歴史・模擬マップについて
- 12:10-12:30 質疑応答

前述のとおり、PACE 福山支部では、申請者による地域安全マップ作製に関する解説のみにより、すべてのメンバーが指導を行っているという現状があった。しかし、指導員によって表現方法や理解の過程が異なるため、質の高い指導を行うためには、より多くの指導員の指導を受けることが非常に効果的である。そのため、提唱者である小宮信夫教授が考案した、オリジナルの地域安全マップを体験し、自分たちの活動と比較できたことは、自分たちの指導の質をもっと上げていきたいというモチベーションの向上に繋がったと考えられる。

研修会の開催地が東京と遠方であり、すべての学生が地域安全マップ協会主催の研修に参加できるわけではなかった。そのため、研修会で他の団体と交流したいという意欲の強い学生を選び、優先的に連れて行った。これにより、PACE 福山支部全体の学習意欲の向上や士気の向上に繋がったと考えている。セミナーに参加した学生は、セミナーで得られた知見について、自分なりの解釈をしたうえで後輩に伝えることになるため、学生自身が発信していく力の向上にも期待したい。

※ 詳細は、以下でも報告している。

学長室ブログ（2024. 3. 30）

【心理学科】後期ボランティア活動報告第5弾！（PACEの学生が地域安全マップ協会からの指導を受けました！）

10 こども遊び広場における運営の効率化と学生による広報活動の強化

所 属 人間文化学部 心理学科
職 名 教授
氏 名 赤澤 淳子

(成果の概要)

本申請課題の目的は、こども遊び広場における運営の効率化と学生による広報活動の強化であった。本助成金を活用することにより、以下のような成果が得られた。

まず、名簿を紙媒体から電子ファイル化し、専用のオフラインの iPad 内に管理することで、名簿の紛失や盗難のリスクを限りなくゼロに近づけることができた。これまでのように名簿を紙媒体で管理すると、特定の参加者の情報にたどり着くまでに時間がかかってしまうことや、参加者の人数が増えることで、管理が複雑になってしまうという問題があったが、電子ファイル化することで、検索もスムーズに進み、最終的に報告書を作成する際にも、必要な情報をすぐに取り出すことが可能となった。また、過去のたくさんの名簿を紙ファイルに保管していたものを全て電子ファイル化することで、保管コストを削減でき、省スペース化にもつながった。

次に、活動の様子については、個人のスマートフォンではなく、専用の iPad を用いて、写真撮影を行うことが出来た。受付の段階で、広報写真としての活用を許可した家族の写真については、その場で写真をプリントし、確認してもらい、投稿の許可が出れば広報資料として活用できる写真として保存することが可能となった。親子での活動場면을写真に写し、その場でプリントアウトして、活動後に保護者に渡すことができるようになり、保護者に喜んでもらえただけでなく、次の活動への参加の動機づけを高める効果もあった。

そして、イベント当日に、学生がお揃いのスタッフ用の上着を着用することにより、親子にもスタッフの存在が明確となり、学生自身にもスタッフとしての自覚や責任感が高まった。

以上のように、学生がこども遊び広場の企画から参加者管理・イベント当日運営までのすべてを担うことができた。これにより、学生が自ら主催している活動であると感じ、活動に対する動機付けの向上やイベント終了後の高い達成感に繋がったと考えられる。